

「旅行団」と「山岳講演会」 —大正期における旅行文化の形成—

赤井 正二*

「信仰との結びつきの解除」と「共同体的結合からの分離」、この二つの条件が近代の旅行が大衆化するための社会的・文化的な前提条件だった。本稿の目的は、この二つの社会的・文化的条件が、いかにして旅行文化に内在的な仕方、準備されたかを明らかにすることである。そのために、大正期における大都市で多数の社会人「旅行団」が結成されたという社会現象に注目し、その動向の背景にある日本山岳会の山岳講演会活動の実態と特質を整理し、さらに日本における近代登山の社会文化的特徴を分析し、最後に、近代登山文化の延長上に成立した「旅行団」が、新しい旅行文化の可能性を拓いたことを見る。

キーワード：旅行団、社会人登山団体、山岳講演会、幻灯、旅行文化

はじめに

旅行に出かけることが数多くの余暇の楽しみの一つにとどまらず「総国民の生活幸福の増進」にかかわる項目であるという視点を、柳田国男はもっていた。彼はこの視点から、「巡礼」という伝統的な団体旅行から、鉄道の発達を前提とした「遊覧本位」の近代的な旅行への転換を、次のように分析したことがある。

「巡礼は日本では面白い形に発達している。最初熊野の道者がやや衰えて、次第に伊勢の二宮をもっぱらとするようになったのも、単なる信仰の発達からとは見られぬのである

が、この経過はもう参考としがたいまでに、その痕が幽かになっている。近代は少なくとも何十個所という霊場の数を繋ぎ合せて、わざと目的を散漫にしようとした形が見えるのである。参拝の大きな意義はむしろ道途にあった。ついでに京見物・大和廻り、思い切って琴平・宮島も掛けて来たという類の旅行も、信心として許されたのであった。…地方によっては名山の登拝を、成年式のように考えている例もあった。誰でも一生に一度はなどといって、年頃が来ると無理をしてもこの群に参加した。遠くなければ娘の子さえも出ている。つまりはこういう特殊な方法で、もう一度内の結束を締め直そうとしたもので、世間を知ろうということは二の次三の次であった。この行楽の興味は忘れがたかったものとみえて、明治に入っても巡礼は決して衰微

* 立命館大学産業社会学部教授

していない。…これから信仰を抜き仲間の選択を自由にすれば、すなわち今日の名所巡りになるのである。この旅は多分旅愁というもの、の今よりもはるかに深かった頃に、これをうしつらしとした者がだんだんに考案したものであろうが、今では汽車の中などはことに群の力を籍りて気が強くなり、普通故郷にある日にはあえてしがたいような我儘を続けている」¹⁾。

この指摘は、近代の旅行文化を江戸時代の「講」システムを軸とした旅行文化の連続的發展として理解するだけでは十分ではないことを示している。江戸時代にすでに世界でもまれな旅行文化が存在していたとしても²⁾、それがただちに、近代日本の旅行文化へ直結するのではない。聖地参拝のための巡礼という旅行から、現代の「名所巡り」つまり観光旅行との間には、「信仰を抜き仲間の選択を自由」にするという脱伝統化ないし世俗化の要素が不可欠なのである。「信仰との結びつきの解除」と「共同体的結合からの分離」、少なくともこの二つの条件が近代の旅行が大衆化するための社会文化的な前提条件だったのである。

もとより、伝統的な旅行文化と近代的な旅行文化との連続性の側面そのものを否定することは無意味ではあるが、しかし近代の旅行の多様な可能性を理解するためには、まずもって非連続性の側面にまず目を向ける必要があると思われる。だとしたら、何が旅行の脱伝統化・世俗化を起動する契機となったのであろうか。

こうした経過を勘案するとき、注目されるのは、伝統的な「講中登山」とは異なった登山を行った諸団体の存在である。明治末期から大正期の全体、そして昭和前期にかけて、しばしば

「旅行団」と名のつた多数の社会人登山団体が、大都市を基盤として結成された。特にこの点では、「登山人口の底辺の幅について神戸など関西の山岳界の動静は、東京を中心とした山岳界をしのぐ発展をとげていた」³⁾と指摘されるほど、京阪神地域が先行していた。これらの都市的な団体を「登山史上に位置づける」⁴⁾ことなく、旅行の近代史から光を当てることが本稿の課題である。本稿では、まず(1)明治末期から大正期の、社会人登山諸団体に注目し、その実態を概観したのち、(2)それらの団体結成のきっかけとなったと思われる日本山岳会による講演会活動の経過を踏まえ、(3)と(4)で、日本山岳会が代表する近代登山が、いかにして近代の旅行文化の発展条件を準備したかについて考える。

1. 大正期の登山ブームと「旅行団」

現代に続く旅行文化の形成と普及に大きな地位を占めていた日本旅行文化協会（1926年「日本旅行協会」に改称）が1924年（大正13年）に創立されたときに、鉄道省や日本郵船などと並んで、東京・大阪・神戸などの都市の自発的な多数の民間旅行団体がその重要な構成員となっていた⁵⁾。

これらの団体の詳細な全体像を示す統一的な資料は不明であるが、1927-1928年（昭和2-3年）と1929年（昭和4年）の二度、日本旅行協会は各地旅行団名簿の作成を試みている⁶⁾。1927-1928年（昭和2-3年）の調査では、総数43団体、地域別の内訳は、関東18、関西17、広島2、名古屋5、福岡1である。また1929年（昭和4年）の調査では、総数65団体、すべて東京の団体である。表1は両調査をまとめたものであり、多くの旅行団が事務所、工場、学校、

商店などの都市固有の制度や場所を基盤にして 調査とも旅行協会創立期のものではない。
結成されていたことが理解できる。しかし、両 近畿圏に限定されるが、旅行協会の創立期に

表1 各地旅行団体名簿（日本旅行協会調査）

1927年（昭和2年）11月号掲載分	其一
団体名	事務所所在地
探勝団 行脚会 婦人子供 樂遊会 浩然会 鈴木商店旅ノ会 浪花探勝ゲラゲラ会 黒磯旅行倶楽部 東京市深川区青年団山岳会 呉あるこう会 緑歌之友会山岳会	大阪市南区九郎右衛門町 大阪市南区九郎右衛門町 神戸市二宮町神戸第一中学校同窓会内 大阪市西淀川日本亜鉛鋳株式会社内 大阪市西淀川区 栃木県黒磯町黒磯銀行内 東京市深川区 呉市西市通 神戸市脇ノ浜町
1927年（昭和2年）12月号掲載分	其二
大阪市電春日出健脚会 シデン旅友会 和歌山和樂路会 名古屋南北山岳会 三省堂アルカウ会 日本探勝倶楽部 福山体育山岳部 浪花探勝 太融会 旅々会 横山いこう会 東京アルカウ会 日本アルカウ会 日本婦人アルカウ会 霊蹟巡拝会 東洋捕鯨株式会社テクロ会 豊田礫旅行倶楽部 名古屋 加雅美会 横須賀山水会 是則旅友会 博鐵探勝旅好会 大阪探勝 好勞加会 サンシャイン旅行会 野山ヲ歩ム会 抖擻会 堺道つれ会 上銀公遊会	大阪此花区春日出車庫内山内運動具店 東京市芝區芝浦月見町シデン芝浦工場内 和歌山市新中通五丁目 名古屋市南区熱田 麴町區大手町一ノ一三省堂内 東京スーショホテル内 福山市東町 大阪市北区 東京市神田区 横浜市元町五丁目株式会社之町銀行内 東京市京橋区 大阪府下豊能郡 大阪市南区新町通財団法人仏教奉仕会内 大阪市西区山口町十四 東洋捕鯨会社内 名古屋市西区榮生町米田 豊田紡績社内 名古屋市中区 横須賀市田浦町 神戸市京町82 是則運送店內 福岡県糟屋郡須恵駅内 大阪市西淀川区 東京市芝區 千葉県松戸町 愛知県幡豆郡 大阪堺市 高崎市田町
1928年（昭和3年）1月号掲載分	其三
横須賀山水会 名古屋南北山岳会 大成旅行案内社	横須賀市外田浦町 名古屋市南区熱田 東京市赤坂区

SSD アルカウ会大阪支部 早稲田大学旅行会 上銀行慰会 みゆきかい 山牛会 互樂会	大阪市南区須慶町一ノ四一 三省堂内 東京市牛込区 高崎市田町 株式会社上州銀行内 東京市麴町区有楽町 東京瓦斯株式会社 東京市日本橋区 三井鉱山株式会社 京都市小川通御池下ル寺井方
1929年（昭和4年）2月号掲載分	其一
シデン旅友会 岳友倶楽部 ゆかう会 山手会 みゆき会 早稲田大学旅行会 大成旅行案内社 鼎香倶楽部 白樺旅行会 とほへ会 東京ヤジキタ会 早稲田実業学校アルカウ会 東京蝸牛会 日本遊行会 本高旅行倶楽部 ユカウ会 麻布中学校山岳部 スター倶楽部 久原鉱業株式会社体育会遠足部 南筑青年団紫明会 日本探勝会 鐘紡ユカウ会 みづものむれ	芝区芝浦月見町 市電芝浦工場内 東京府下北品川 京橋区岡崎町櫻橋通（渡邊袴店） 日本橋区駿河町一（三井鉱山株式会社内） 麴町区有楽町一（東京瓦斯株式会社内） 早稲田大学内 赤坂区室町 日本橋区兜町四 東京府下杉並町 日本橋区青物町 日本橋区通油町 牛込区早稲田実業学校内 市外高田町 本郷区三番町 本所区横綱町 小石川区 麻布区木村町 芝区三田同胞町 丸の内 京橋区小田原 本所区小泉町 東京市外向島 東京市京橋区南八丁堀 石川商店内
1929年（昭和4年）3月号掲載分	其二
芝千社党 東京トクロウ会 東京旅茶園 口東製氷株式会社職員相互会旅行部 東京ピクニック倶楽部 東京山岳部 旅々会 三省堂アルカウ会 三菱足之会 日帰り旅行会 大森池原同心会 日本遊行会 国民旅行会 鐵足会 交盆旅行会 ヘルス会 盆友会旅行部	東京市芝區三田 京橋区南伝馬町 本所区茅場町 本所区 市外大崎町 市外品川町 神田区栄町 麴町区大手町 丸ノ内三菱合資会社内 下谷区上根岸 府下入新井町 本郷区弓町 京橋区国民新聞社内 本郷区弓町 神田区 日本橋区兜町丸谷商店 神田区

庚申行脚会	日本橋区
東京旅行会	牛込区
日本旅行倶楽部	東京駅内ジャパン・ツーリスト・ビューロー内
日本探勝倶楽部	東京ステーションホテル内
リュックサック倶楽部	本郷区
東京登山会	下谷区
東京旅行クラブ	小石川区
東京アルカウ会	京橋区南鍛冶町
テクリ会	日本橋区本町
東京赤毛布山岳会	下谷区
東京野歩路会	浅草区旅籠町
東京三島山岳会	芝区三島町
白馬会	丸ノ内東京鉄道局
城北山岳会	府下南千住
極東山岳会	府下淀橋
東京山岳会	本郷区菊坂町
東京陸山岳会	浅草区寿町
山吹倶楽部山岳会	浅草区阿部川町
東京アイガク会	下谷区豊住町
建国山岳会	府下砂町
江東山岳会	深川区
ジャパン・キャンプ・クラブ	丸ノ内丸ビル四階
東京山嶺会	牛込区
野天登山岳会	神田区和泉町
日本名勝研究会	府下野方町

より近い資料として、「大阪旅行團聯盟會本部」が発行した小冊子『大阪旅行團年鑑 附記幹部名簿』（大正14年、第二版）（1925年）がある。第一版は大正12年（1923年）に発行されている。大阪旅行團聯盟會本部は、1923年（大正12

年）に結成され、陸上競技大会や聯盟合同の旅行を行っている。写真1は『大阪旅行團年鑑』より創立総会の模様であり、写真2は同じく合同旅行の模様であるが、ともにこの時期の盛り上がり方を伝えている。



写真1 大阪旅行團聯盟會創立総会



写真2 第五回聯合大会鳴門観潮

またこの資料には、大阪・神戸・京都の134団体の名称が掲載され、その内大阪旅行団聯盟會所屬の59団体については、設立時期、趣旨、幹部、正会員数、活動状況などが紹介されている。表2は、大阪の団体についてはその名称と正会員数、神戸と京都の団体については名称を整理したものである。大阪・和歌山の各団体の創立時期は、大正2年-1団体、5年-1団体、6年-2団体、7年-1団体、8年-3団体、9年-4団体、10年-2団体、11年-16団体、12年-11団体、13年-11団体、14年-7団体であり、大正11年に飛躍があったことが分かる。

表2 京阪神の旅行団体（大正14年10月調査）（『大阪旅行団年鑑』より作成）

大阪（和歌山を含む）	会員数	神戸（神戸愛山協會加盟団体）	京都
大阪探勝 青遊會	1284	神戸ヤジキタ會	エスエス會
山岳跋涉 ニコニコ會	90	神戸箕楓會	京都ワカバ會
登山探勝 堺道ずれ會	1528	日本サグロ會	京都鉄脚會
探勝旅行 大阪ヨタ／＼會	180	探勝團日本マワロー會	ヒヤメシ會
探勝 大阪仙探會	320	神戸葺合同窓青年團	京都東箭健康團
社寺巡拝 大阪巡禮會	1200	神戸大平山岳會	京都健脚會
大阪登ロウ會	183	獨歩會	健鍊同志
大阪探勝 マイロ會	300	日本モミヂ會	オハヨウ俱樂部
大阪探勝 勇行會	376	探勝團ユカウ會	三木會岬々部
質実剛健探勝旅行 大阪比彌芽志會	264	神戸エーデ徒歩會	京都山岳會
大阪探勝 登運歩會	825	神戸タドロウ會	京都ウロツコ會
大阪探勝 金剛會	920	神戸山登里徒歩會	京都旅行俱樂部
和歌山和樂路會	100	突破嶺會	京都信友會
登山探勝 浪花山岳會	196	神戸明輝徒歩會	京都山川會
浪花探勝 紀行會	375	神戸旭山岳會	Aビン俱樂部
宇宙觀察 大阪スミレ會	280	神戸あゆむ會	鐘紡京都支店登山部
大阪探勝 紫里我瑠會	245	神戸海榮登山會	親友會山岳部
大阪探勝 竹馬會	520	神戸探勝會	日本テクロー會
浪花探勝 大阪アルコ會	500	北隈青年會登山部	京都旅行団体聯合會
大阪探勝 ヒサゴ會	756	神戸基督教教育年會徒歩會	伏見山岳會
探勝登山 大阪青年登山會	50	神戸商業實修學校登山部	
大阪探勝 ミユキ會	89	神戸貿易青年會山岳部	
大阪探勝 あしなみ會	120	神戸登山會	
浪花探勝 あしべ會	180	長狹青年會登山部	
登山探勝 日本めぐり會	212	神戸勇行徒歩會	
山岳旅行 浪花共樂會	150	神戸三四登山部	
大阪探勝 一行會	250	神戸タカネ登山會	
大阪探勝 コーシヨ會	500	神戸山岳會	
浪花山岳 關西勇行會	90	神戸徒歩會	
浪花山岳 わらお會	160	神戸野歩路會	
探勝旅行 テクテク會	272	暁會	
大阪探勝 あゆみ會	380	神戸參行會	
大阪探勝 遊行會	213	K E 登山會	
浪花探勝 天狗俱樂部	560	神戸テクロー會	
探勝旅行 和歌山マイロ會	160	扇湊探勝會	
徒歩趣味 ゲートル會	160	神戸アノヤマ會	

登山単勝	大阪鈴鳴會	85	神戸鷄鳴徒步會	
大阪探勝	好加勞會	150	神戸ヒバリ登歩會	
大阪探勝	エガホ會	250	神戸兎亀巴會	
大阪探勝	むつみ會	160	神戸美登里山岳會	
山岳跋涉史蹟探勝		125	神戸山岳コエロー會	
日本アルペン俱樂部				
大阪探勝	チョコ／＼會	270	日本行脚會	
御津分會	山岳部	182	神戸日の丸會	
大阪探勝	メッポー會	95	神戸扇友會	
大阪探勝	西大阪克遊會	80	六五徒歩會	
浪花探勝	岳進俱樂部	105	山岳同好會	
大阪探勝	行路歩會	215	神戸日曜登山會	
大阪探勝	暁會	55	神戸進踏會	
登山探勝	日本山岳俱樂部	60	兵實山岳會	
登山探勝	大阪天茶會	270	兵庫多加 登會	
大阪探勝	蹴登走會	85	神戸デカケロ會	
探勝旅行	大阪阿湯美會	147	扇港若葉會	
浪花探勝	愛岳會	110	兵庫鐘紡登山會	
浪花探勝	遊美會	80	林田實業青年團山岳部	
登山探勝	日本岳遊會	180	日本アルコウ會	
浪花探勝	ユコー會	350		
大阪探勝	つばめ會	560		
大阪探勝	参晴會	60		
登山探勝	大阪登山會	75		

1921年（大正10年）9月10日、横有恒（当時27才）によるアイガー東山稜初登攀のニュースは、登山の大衆的な拡がりの決定的な契機となった⁷⁾。しかし、このような個人の顕著な成功のニュースが、多くの都市生活者の参加を呼び起こすには、その間に少なくともさらに二つの要因、つまり団体相互の連携交流と外部への直接的な情報発信といった組織的な要因と、集合的な熱狂ともいべき情緒的要因とが、必要である。そして、これらを実現する媒体が、「山岳講演会」というイベントであった。

日本旅行協会の創立経過におけるこれら民間団体の実態と役割について、神戸鷄鳴徒步会の城谷寅一は興味深い事実を『旅』創刊十周年記念号で記している。「三好先生（十幾年本職の絵を捨て、斯界に努力された偉大なる業績に對し、特に先生と敬称す）（註：三好善一、美代司

斗南のこと）が其の筋の命を運び、近畿地方の旅行登山団體を大阪の中央公會堂に集めてから、間も無く日本旅行協會が生れた」⁸⁾。「間も無く」ということには注釈が必要で、日本旅行協會は1923年（大正12年）に創立する予定であったが、9月1日の関東大震災によって一年延期されている。だが、この発言で最も注目すべきは、その前の二つの点である。「其の筋の命を運び」とは、旅行協會そのものの発案者である当時の鉄道省旅客課長・種田虎雄^{おひた}の意向のことであろうし、「近畿地方の旅行登山団體を大阪の中央公會堂に集めて」というのは、1921年（大正10年）6月26日、日本アルカウ会の主催で大阪中央公會堂において開催された『山に關する講演會』を示している。この講演會が、既に指摘した大正11年の大阪地域での団体数に見られる飛躍のもう一つの現実的な要因と思われる。

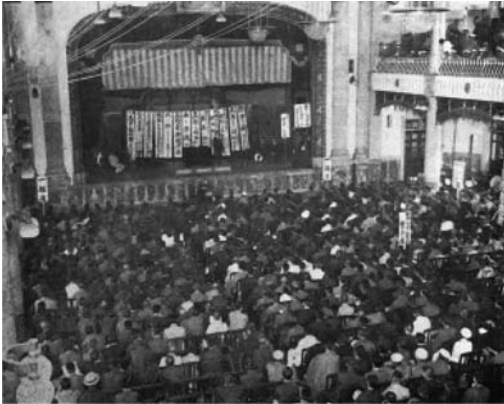


写真3 1921年『山に関する講演会』



写真4 槍ヶ岳での婦人アルカウ会会員

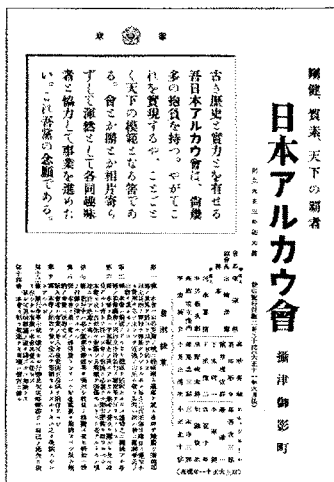


写真5

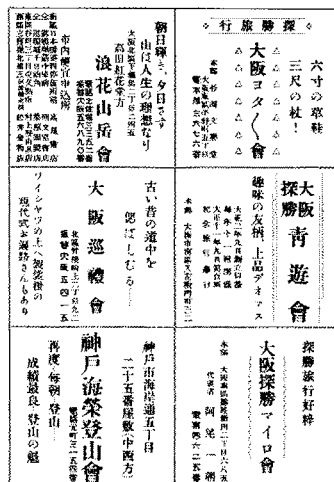


写真6

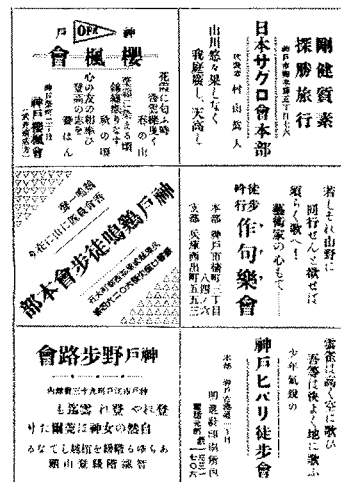


写真7

る。

この講演会の記録は、多数の写真と資料、さらに1922年（大正11年）6月に行われた大阪毎日新聞社主催の横有恒の二回の講演記録を追加して、日本アルカウ会編『山岳美』（大正11年）として出版されており、それによれば、講演者と演題は以下の通りである。日本山岳会員・中山再次郎「スキーの話」、日本山岳会員・河野齡藏「日本アルプスの地形と気象」、日本山岳会員・志村寛「針木越へ」、日本山岳会員・木暮理太郎「黒部の峡谷」、日本山岳会員・朝輝

記太留「米國レニア登山、ロッキー山脈一支峰」、日本山岳会員・榎谷徹藏「マッター・ホーン」、文学博士・谷本富「山と宗教」。写真3は大阪中央公會堂の『山に関する講演会』の模様。写真4は『山岳美』より槍ヶ岳での婦人アルカウ会会員、写真5、6、7は同じく『山岳美』に掲載されている諸団体の案内の一部である。

今日では「登山」はスポーツの一つとして意識され、実態としても概念としても「旅行」とは重なるところが少ないように見えるし、まし

て「観光」とはほとんど接点をもたないように見える。しかし、「日本旅行協會」の成立経過は、「登山」あるいは「山旅」が、今日に続く旅行文化と深い関係にあることを示唆している。特に、近代の旅行の世俗的性格、つまり「信仰との結びつきの解除」と「共同体的結合からの分離」は、「近代登山」の文化的衝撃を抜きにしては考えられないのである。各地で結成された旅行団も、大阪での「山に関する講演会」も、山岳と登山をテーマにした各地での講演会とそれが引き起こした登山ブームの延長上にあったのである。しかも、「山岳講演会」という形は、大正10年の時点には鉄道省の思惑がそこに働くまでに定着していたのとは異なって、その端緒である明治末期においては、全く純粋な文化的プロジェクトであった。

2. 明治末期から大正初期における日本山岳会による講演会活動の展開

1921年(大正10年)の『山に關する講演會』での講演者がほとんど日本山岳会の会員であったように、「日本山岳会」が、日本における近代登山の普及に決定的な役割を果たしたのは周知の通りである。イギリスの宣教師ウォルター・ウェストンの強い薦めと支援を受けて、1905年(明治38年)10月に結成された「山岳会」が、雑誌『山岳』の発行事業から一歩踏み出して、一般市民を対象とした啓蒙活動を開始するのは、1908年(明治41年)5月17日「山岳會第一大會」においてであった。東京市日本橋區、東京地學協會會館で開催された大会は、写真、地図、標本、絵画、書籍、登山用具等の多数の展示と、講演から成り、講演者と演題は、小島烏水「ラスキンの山岳論」、志村烏嶺「日本アルプス雜

觀」(着色写真の幻燈使用)、山崎直方「歐洲アルプス雜觀」であり、参加者は会員70名、非会員21名、合計91名であった。「來會者の職業は新聞記者、陸地測量部員、天文臺員、商人、農業家、教員、學生、美術家、著作家、銀行員、工業家等の諸方面に亘り、…」⁹⁾と記録されている。しかし、1912年(明治45年)3月9日、神田区一ツ橋帝國教育會で開催された「ウエストン氏日本アルプス講演会」は、様相を大きく変え、「有志晚餐会」のようないわば身内の範囲を越えて、600名規模で開催される。この講演会でも幻燈が活用され、「鳳凰山のオベリスク状岩石登りの冒険談は大喝采」¹⁰⁾を博すが、この講演会で通訳者の一人となった小島烏水は後に、アルプス岩壁登りの一枚は「觀衆に受けなかった」とし、「まだ岩壁登攀と云うことは、日本の登山者の間では、行われていなかったし、むしろそういう仕事を、輕業か曲芸のように考えて、登山の邪道扱いにしていたため」¹¹⁾と分析している。

大正期に入ると映像資料や登山用具の展示会と幻燈を活用する講演を組み合わせた「山岳講演会」は一層の盛況をみることになる。『山岳』で紹介された記事から、関西での「山岳講演会」の開催と登山熱の拡がりを見てみたい。

1913年(大正2年)10月18日、三高山岳会の結成を記念して、「三高山岳會主催講演會」が開催される。日本山岳会から、小島久太(烏水)、辻村伊助、高野鷹藏が派遣され、参加者は600名を越えた。主宰者となった学生側からの詳細が次のように記録されている。

「この機を外さずと、矢継早に手を廻して、只講演會のみでは初歩者には興味が薄い、奮

發して幻燈を添え、ならうとなら、當地より大學教授、日本山岳會より幹事諸先覺の、御出演を乞へば、申し分がない…今回は三高生徒のみの、内輪にしないで、關西一般に、山岳趣味を普及したいから公開する事にした、會場はかゝる會合に、最も適當な京大学生集會場を…借りた、…市中に散布するピラの繪は、燕岳より見たる鷺羽小鷺一帶のスケッチを、怪しくノタクツて、四色刷にした、印刷屋に毎日足を運ぶ、名士宛の招待状を刷らせる、ピラを鴨川京極三條通祇園邊に配る、市中の山岳會員を訪問して、出品を乞ふ、あらゆる方面に遊説する、…愈よ當日になつた。…受付けへ行つて見ると、驚いた、今日の入場者は、二百人位と思つてゐたら、ゾロ／＼際限なしに入つてくる、…さあ愈講演だ、幻燈だと、胸を躍らせながら、階上に行く、之は又何事ぞ、あの二百疊敷きの廣潤な會場は、聴衆者でギツシリ詰つてゐる…、(小川博士、小島烏水に続き、[引用者補完])、これから呼物の幻燈である。…高野鷹藏氏は、…登壇された、最初に立山登山路の草原を寫せば、恰も實地に臨むが如く、詳細な説明があり、出る寫眞、變る映畫、一として聴衆は贊嘆の聲を惜しまなかつた、立山及槍ヶ岳より、有峰村に至る傑作三十餘枚、早く取換へるのが惜しい位で、いつもながら、槍ヶ岳が諸山脈の上に、ピーンとハネ上がつてのを見ると、フルへつきたくなる。…閉會の辭を述べた時、六百有餘の聴衆は、残り惜しさうに起つた、かく大成功の裡に解散したのは、十時であつた」¹²⁾。

この講演會が、京阪神での登山ブームのきっかけとなったことについて、小島烏水の弟の小

島榮は次のように述べている。

「忘れもしない昨年の十月十八日、三高山岳會と京阪會員の努力とに依つて、未曾有の盛大な山岳幻燈講演會は實現された、(本誌第八年三號雜録参照) 夫れ以來、京阪神地方に於いて、山岳熱は非常に瀰漫された、殊に京都では、手近の比叡山は登山者のために一層頭が禿げ出した、大阪朝日新聞等は、夏期に山岳欄を設けて、登山談を載せ、會員今村氏の如き、連日怪氣焰を述べられた」¹³⁾。

次の年、1914年(大正3年)11月、日本山岳會主催で日本山岳會第二回関西大會が京都で開催される。展覽會は1日から3日まで京都府立図書館で、1日の講演會は京都大学学生集會所で行われた。テント、日本アルプスの地図、登山用具、植物採集用器具、富士の写生図、日光・箱根などを描いた広重の錦絵、植物・鉱物の標本、多数の山岳写真、ヨーロッパ・アルプス関連の書籍、登山用具などが展示され、講演會には約五百名が集まり大盛況であつた。講演者と演題は、比企工科大学助教授「山岳と岩石」、小島烏水「飛驒山脈に於ける雙六谷の探検」、岩村理學博士「ホインパー氏と欧州アルプスの雄峰マッターホーン」(幻燈使用)、高野鷹藏「日本アルプス」(幻燈使用)であつた。講演會の模様を、大阪朝日新聞は次のように伝えている。日本における近代登山の歴史と雙六谷水源への旅の報告を行った小島烏水氏が「大喝采の裡に降壇し」、比企工科大学助教授の岩石の種類、近畿の構造線についての講演は「滑稽交りに面白く物語つて大向ふの喝采堂を動かした。また最後に幻灯を使った高野鷹藏氏の講演。「英國のウインパー氏がマッターホーン

に登らうとして八回も失敗し九回目に漸く成功した危険なる物語は血湧き肉躍るの感があつた。殊にウインパー氏がマツターホーンの頂上に達した時の幻燈は聴衆に登山の愉快なる印證を興へ下山に際し三人迄變死した物語には哀れを催さしめた、此幻燈が済むと今度は日本アルプスの幻燈が初まった、説明者は高野鷹藏氏で如何に山嫌ひな男でも一度は日本アルプスに登りたい様な気分が湧いて来る、斯て午後九時過ぎ多大の成功を収めて散會した¹⁴⁾。

この時の高野のスライドを小島榮はより専門的な見方をしている。「四十餘枚の映寫は、例に依り天然色に出で、痛快極まりない、殊に後立山々脈の、八ツ峰の嶮に至りては、日本唯一の縦走不可能の難所と、聞いて興奮した聴衆は、肩を聳かし膝を進めて、穴の明くほど見詰めた¹⁵⁾。

1915年(大正4年)、大阪市でも山岳会の「關西大會」が開催され、引き続いて小規模の山岳講演会がより大衆的なレベルで拡大していくが、この様子は、『山岳』の「各地の山岳會彙報」の(一)(二)から知ることが出来る。

「各地の山岳會彙報(一)」では、いずれも山岳会員・榎谷徹藏を講師とする三つの山岳講演会が報告されている。第一に、1915年(大正4年)6月16日大阪小間物商工組合の定例講演会、参加者は400名以上、第二は、6月22日、東平野校での講演会、これは生徒を含めて聴衆一千名であった。第三は、7月10日、東区第二高等学校での講演会で、聴講した生徒は500名であった。つまり、大阪小間物商工組合の定例講演会のように、特別の山岳講演会ではなく、既存のシステムの中に入り込み始めるのである。

「大阪小間物商工組合では、自助會といふの

を組織して、毎月一回知名の士を聘して修養本位の講演會を催ふしてゐるが、六月の會には丁度同地でアルピニズムの勃興しかゝつてゐるのを機として、榎谷徹藏氏の日本アルプス實地探検談を頼んだ。…例月のときは多く硬いコンヴェンショナルな修養談ばかりなので、晝間激烈な業務に従事して、そして恒にフレッシユな思想に憧れてゐる人達は、聴講中随分欠伸や居眠りをやるのだが、今回はそれ等の人達に對して可なりストウライキングな材料であつたから、珍しくも四百有餘といふ發會以來に無い多數の聴講者は、いづれも熱心に耳傾けた¹⁶⁾。

こうして、これまでの山岳大会には参加しなかったより広範な層に新鮮な衝撃を与える新しい回路が拓かれていく。この年には大阪市教育會主催の「日本アルプス踏破團」が四つの班に分かれて北アルプスに、市内の六つの小学校も吉野に登っており、報知新聞社は本社に「安心所」を設け「山岳旅行顧問」活動を開始している¹⁷⁾。

これ以後、奈良、名古屋など各地で山岳講演会が開催され、山岳・登山ブームはさらに周辺に拡大していく。山岳と登山への関心はエリート層と学生から一般市民に拡大して行くのだが、その重要な媒体となったのが、日本山岳会の大規模講演会活動から始まり、小規模の講演会、各種の既存民間組織、公教育関連組織での講演会へと続く講演会の系列であり、さらに特に、スライドの上映が講演会での「呼び物」として重要な、時には決定的な役割を果たしていたことに注目したい。既に見た各講演会での模様に加えて、1915年(大正4年)6月23日に開催された京都での講演会についての次の記事

は、スライドが聴衆の強い情動的な反応を呼び起こしていたことをよく示している。

「高野氏、急霰の如き拍手の下に登壇、日本アルプスの幻燈數十枚につき懇篤なる説明を、丁度アルプス溪流の如く清く且滔々として述べられた、今夕は、アルプスと云ふものに接するのが初めてと云ふ人が多いだけに、幻燈が一枚一枚代わる毎に、驚きと喜びと珍しさに「アツ」と云ふ感嘆詞が満堂に響き亘る、殊に槍の鋒尖や、山間の温泉や、五色ヶ原の植物や、その他雪に富む山々の影が表はる、毎にその感嘆詞と拍手とが永劫に止まないのか知らと怪しまれるばかりであつた」¹⁸⁾。

大正初期の市民・大衆レベルでの登山ブームの底にある心情は、まずもっては宗教的心情とは全く無関係な、純粋に視覚的な美的感動だったのである。

3. 近代山岳登山の文化的特質

なぜ、「山岳講演会」が多数の一般市民を動員することができたのか、また継続的な拡大の螺旋を作り出すことができたのだろうか。この点について、大衆社会の成熟といった社会的条件の変化から説明することもできる。しかしここでは広義の「旅行文化」のなかで、山岳登山というあたらしい行動が持った意味について、第一に脱伝統性と、第二に都市勤労者・生活者の文化という二つの点から検討したい。

創立されたばかりの山岳会が取り組まざるを得なかった対外的な活動に、白馬山山麓にある北城村細野区民との協議があった。『山岳』第一年第一號所収の「白馬山と北城村細野區の將

來」¹⁹⁾によれば、昨年（1905年、明治38年）夏になって地元、長野県北安曇郡北城村細野区民は、「登山者に對して悪感情を抱き、彼等の及ぶ限り消極的妨害を試み、人夫の供給を拒むのみならず、若し之を諾したる者には少なからぬ過怠金を科すべき旨の申合を爲すに」至った。日本山岳会は、「登山に對する故障を排除して同志者の爲め便宜を計るは、本會創立に當て第一の事業なる可きを認め」、長野県に人脈のある会員城數馬氏に調停を依頼した。交渉の結果、悪感情が「誤解若くは行き違ひ」によるものであることが明らかとなり、最終的に細野区民との間で、責任ある案内者を提供すること、その料金に規準を設けること、白馬山上に小屋を建設計画を策定することについての合意を得たとなっている。しかし、この間の経過の原因が単純な「誤解若くは行き違ひ」でないことを、志村烏嶺は前田曙山との共著『やま』（1907年）で明らかにしている。志村が植物採集の目的で第三回目の白馬山登山を計画し、北城に到着したときに村民の反対を受けるがその顛末を志村は次のように報告している。

「古来白馬岳山下の村民は、岳（村民は白馬岳と言わず普通岳あるいは西岳と言う）を尊崇すること神の如く、恐れること悪魔の如し。もしそれ人のこの山に登り神威を冒瀆するものあれば、山靈大いに怒り岳暴ありと称して、相戒めて登山することなからしむ。人智ようやく進みたる今日にありてもこれを迷信するもの少なからず。然るに近来登山熱の盛んなる、植物採集家の近年しきりに登山するを見て、彼等はすこぶる不快を感じしものの如し。八月初旬余等一行の登山するや近年稀なる暴風雨、彼等これを見て平素の迷信を

深くせしならん。その後連日の降雨、溪流怒漲、河水氾濫、田畑その害を被るものはなはだし。かくのごとくして不良の天候回復せずんば、禾穀稔らず飢饉を見ること必然なりとし、山下の細野、四ツ屋、大出、蕨平、深沢新田、塩島などの字々皆各鎮守の社に集まり、天気祭（大旱には雨乞いと称して降雨を祈り、霧雨には天気祭と称して晴れを祈るは、この地方一般の習俗なり）をなし、天の晴れんことを祈る。時に白馬山上に数名採集家および細野人夫の滞留せるありしかば、これを聞きし村民等大いに怒り、各字より総代を出だし細野に至り、他地方人の山上に在るは如何ともすべからずと雖も、山下細野区民の山上にあるは不都合極まれり、我等は日々幼を携え老を扶けて村社に祈ることここに日あり、然るに天の晴れざる所以の者は、彼等山上に滞留するものあるが故なり、速やかに下山せしむべし。また他に登山者あるも、細野区民の案内するものなくば登ること能はざる山なるが故に、今後は一切案内者の登山を禁ぜられたしと申込み。細野区に於いても、これに同意し、人夫をして下山せしむべく、二名を派し、また一切登山せざる規約をなし、もしこれに背くものあらば、相当の制裁を加えることとなせり。山上に登りし二名の者は、命を伝えて人夫を下山せしむ、されば山上にありし人々は非常なる困難に遭遇せしと聞く」²⁰⁾。

「村民余等の登山を見て喜ばず、田畑にあって鋤を執る者、路上相会う者、皆一種不快の眼光を以て余等を目送す」²¹⁾ という雰囲気の中、志村は他村から人夫を雇って登ることになる。また反発の程度はこれより軽いが、武田久吉

は、明治三十四年—明治三十七年（1901-1904年）頃の話として、甲斐駒山中で講中登山の一行との出会いを描いている。

「小屋に入れば、そこには一隊の行者が居たが、その先達と覚しきものが、行衣も着ず、しかも人夫に重そうな荷を負わせて来た私を、異端邪道の闖入者とでも見て取ってか、何のために来たのかと質問を浴びせた。植物採集だと答えたところが、にわかに信じかねてか、外に出て一本のクルマユリを背後に隠して持ち来たり、この草を知っているかとテストした。もちろん難なく答えたのに安心したらしいのは滑稽であった。その頃、信仰以外で高山に登る者のいかに少なかったかがよく判る。後で知ったことだが、この山に植物採集の目的で登ったのは、私が三人目で、以前に二人の一人は甲州から、一人は信州から登ったのであった」²²⁾。

近代登山の開拓者達は、変わり者扱いされる無理解、山麓村民の山に対する伝統的な観念、伝統的な講中登山団体との軋轢を経験せざるを得なかったのである²³⁾。

もちろん、講中登山に同伴することも少なかつたと思われるが、その際でも、彼等が得たものはもちろん信仰のより深い確信でも、共同体への帰属意識の強化でもなく、その山頂でのみ得られる個性的な美的感動であった。志村は1906（明治39）年の日本アルプス三大横断の際、立山に富山からの立山参詣集団と共に登っている。ここには講中登山と近代的登山の対比が鮮明に描き出されている。

「八月十二日、午前三時。／板声を相図に三

百有余の参拝者、皆室堂の庭前に出ず。神官が登山者の郷貫姓名を呼べば、皆応と答う。人員の点検終りて、白衣の神官玄冠浄鞋白幣を振って先登す、衆後に従う。四囲未だ黒暗々星斗闌干たり。余等また従う。…前日と同一の登路を取りて、再び立山の絶頂に向う。一ノ越、二ノ越を経て路険となるや、皆口々に六根清浄を唱う。前後呼応魚貫して進む。登山者の多くは越中の青年なり。越中の俗、男子は必ず一度この山に登らざるべからず。また同村より数名一団となりて登山するや、立山の絶頂を極め、直ちに下山し、先登第一郷社に賽するを以て栄となす。もし疾病疲労のため途中に倒れる者あるも、神罰となして顧みることなしと。今、これ等の青年を見るに、何れも元気の盛んなる意気衝天の概あり。五ノ越に達せるは午前四時、東天ようやく紅なり。絶頂は二十名内外を座せしむるに過ぎざれば、一同まず石室付近に集合し、順次社殿に参拝す。神官ために祓いをなす。神官が撃つ天鼓の響き鑿々として全山に響く。すでにして朝暾東方の横雲を破り、躍然として昇り、天地はじめて暗明なり。高山に於ける日出の光景、壮絶快絶、然れどもこの大観は富士に於いて、白馬に於いて、槍ヶ岳に於いて、御岳に於いて、皆これを見ることを得べし。独りこの立山の頂上にあらざれば見ることも能はざる天下の偉観、宇内の壮観は何。／いわゆる日本アルプスの連嶺を眼前に拡げて、一目の下に達観せしむることを得るは、秀麗芙蓉峰の頂にありても、陰絶槍ヶ岳の頂に於いても、雄大白馬の頂に於いても見ること能はず。嗚呼、一度立山の峰頭に立ちてこの大観を恣にすること能はずんば、口に日本アルプスを説く勿れ。山を愛するの士、

願わくは必ず一度立山の絶頂を極めよ。この壮観偉観は筆にて伝える能はず、口にて説く能はず」²⁴⁾。

近代登山、あるいは「登山のための登山」²⁵⁾がその本質において、非伝統的であり、時には反伝統的であらざるを得ないという自覚は、その開拓者たちに共有されている。山岳會の発起人の一人であり財政支援者であった新潟の大地主・高頭仁兵衛（高頭式）は、日本は山岳国であり山に登る習慣は我が国の伝統に属する、例えば富士山を典型とする多くの山が信仰の対象となり登山も盛んである、という意見に対して、「是れ迷信のみ、信仰の厚きを知られんが爲に巉岩を踏み絶壁を攀づるなり、神佛を祈るの深きにして山を愛するに非ざるなり、彼の愚夫愚婦の御百度を踏み垢離を取るに異ならざるなり、故に某々若干の山岳を除きては、登路山容を詳記せるもの絶無に非ずや」²⁶⁾と厳しい拒否の姿勢を示している²⁷⁾。

山岳會の初期にその実質的な中心にいたのは小島烏水であるが、彼は多くの著作をとおして何度も山岳登山の流行が一時的なものでなく、人間と自然の思想にかかわる事柄であることを思想的に論証しようと試みているが、その際もつねに、伝統的な信仰との結びつきの否定は前提されており、「今日では、さすがに山岳を神聖視して、罪障の消滅を祈つたり、未來の冥福を願つたりする人々は、智識ある階級には絶無」²⁸⁾であるはずとの認識をもっていた。小島烏水が、そしてまた今日まで山岳登山に関心を持つほとんど総ての人々が「なぜ山に登るのか」を問題にせざるを得ないのは、伝統的な意味を否定した結果に他ならない。

木暮理太郎は維新前の信仰登山と近代登山と

の連続性に関心を寄せて、「自然愛の思想」²⁹⁾にその根拠を見出している。しかしその場合でも、「維新後に於いて総ての文物が一変したのと同じ様に、登山の形式内容共に亦一変した」のであり、「現代の登山は維新前に於ける登山の延長であるとは言えない」³⁰⁾ということは自明であった。維新前の登山では「其型式は固定し、年々歳々同じ登山が繰り返されるのみで、内容には少しも変化を起さなかった。量は増しても質に於ては依然たる宗教登山で、一步、唯一歩を踏み出した宗教を離れての登山が遂に行われるに至らなかったのである」³¹⁾のである。これに対して、「明治の初期に於ける近代式文化登山は、維新前に取り残されていた日本アルプスに於て生育し発達した。此地域は何といっても面白い山登りを提供する舞台として、内地では他の追従を許さぬものがある。宗教的登山の残骸に嫌らない明治中期後期の登山家が競うて活躍したのは此処であった。大正から昭和にかけて少壮登山家が岩登りや冬期登山に必要な登山技術を練磨したのも此処であった。此処こそ明治以後に於ける近代登山の発祥地であり、登山を現に見る如く隆盛ならしめた揺籃の地である」³²⁾。彼は、伝統的な宗教登山と近代的な登山との決定的な差異を「形式と内容」の固定性・画一性と発展性・多様性に求めている。

伝統的信仰登山との断絶の意識とともに、第二に、都市勤労者・生活者としてのアイデンティティーもまた近代登山の開拓者達に共通してみられる。日本人による近代登山の嚆矢の意味を持つ、1902年（明治35年）8月の「槍ヶ嶽探検」は横浜正金銀行行員であった小島烏水とスタンダード石油社員であった岡野金次郎によって敢行されるが、「一日を吝むこと、万金なほ

換へがたき」³³⁾というほど、制限された夏期休暇の下で行われている。さらに小島は、「近來邦人が、いたづらなる夏期講習会、もしくは無意義なるいはゆる「湯治」「海水浴」以外に、種々なる登山の集会を計画し、これに附和するもの漸く多きを致す傾向あるは頗る吾人の意を獲たり」とし、「夏サママー・ヴァケーションの休暇は、衆庶に与へられたる安息日なり、飽食と甘睡とを以て、空耗すべきにあらず」³⁴⁾とまで言う。

しかしより重要なのは、烏水の場合、山岳への憧憬が都市化を軸とする「近代」の中に位置づけられていることである。これは、現代の都市的生活条件についての社会心理的な分析に他ならず、少なくとも可能性の点では、近代登山が都市的近代の生活者と深く結びつく可能性を持っていることを示している。「我等現代の人間は、今や生活の慾求に根ざせる喧噪と、騒擾と、煩悶と、勞苦のため、何の刺戟も利かず、何物にも驚異する力を失っている、剩すところは、只だ肉體の倦怠である。避遁的と言はゞ言へ、石の兀々たるところに、天國の幸福を見やうとしてゐる、さうしてそこに到るには、今でも、やはり難行と禁慾の自己犠牲を要さないわけにはゆかぬ、そこに伴ふ一種の苦痛感を甘しとする山岳崇拜宗徒を出だしたのも、頹廢的傾向が生じた近代の一現象で、只だそこに剛健に似た皮を被せてあるまでである、ゲエテも言つたやうに「凡べての絶頂には静止がある」せめて生涯に幾日かの静止を——」³⁵⁾。

さらに、都市との関係という点では、田部重治と木暮理太郎の秩父への山旅も、新しい美の発見という意味以外に、東京に近いという地理的条件かつ鉄道の便がよいという条件が重要な要素になっていた³⁶⁾ことを付け加えることができる³⁷⁾。また、この方向を推し進めた菅沼達

太郎は、「私は山へ登る事は二の次ぎであつて、唯だ東京を離れて山國へ這入れば、其れで十分に満足出来る」³⁸⁾とさえ言い、山旅における山との肯定的関係の形成よりも、東京との否定的関係の形成をより重視している。

大正から昭和にかけて、伝統的な宗教性からの分離が、登山と山旅の多様な指向性を解放し、形式と内容、どの山をどのように登るか、山か溪谷か高原か峠か、絶頂を目指すのか目指さないのか、スポーツ性と精神性との関係…、山に対するアプローチが、多彩に展開されていく。他方では、都市を基盤にした自発的な「旅行団」の結成が継続する。

4. 市民的旅行団体の志向性

柳田國男から「自分の空想は一つ峠会というもの組織し、山岳会の向こうを張り、夏期休暇には徽章か何かをつけて珍しい峠を越え、その報告をしゃれた文章で発表させることである」³⁹⁾などと揶揄されながら、日本の近代登山は、日本アルプスを舞台とした初期の探検時代を終えて、大正期に普及と多様性の時期に入る。大正期に叢生した市民的「旅行団」「登山団体」に対する最も辛辣な批判は、『R・C・C報告 Ⅲ』（1929年、昭和4年）に掲載された水野祥太郎の「午後三時の山」であらう。

「徒歩會、アルカウ會以下の「登山團體」を形成してゐる多數の登山者は、然し、大多數は事實、唯の静觀的低徊者か、微温的健康留意者であり、スポーツ的アルピニズムの洗禮を受けてゐない人々であり、軽い信心家として、又、古物觀賞家としてお寺に「山登り」もするし、静觀的自然觀賞家として琵琶湖に

「登山」し、破壊的自然觀賞家として吉野山の花に「登山」もするのである。然し乍ら矢張り彼等も亦、「登山家」の名を僭稱せんとし、何人も敢て怪しまうとはしない。アルカウ趣味に云ふ如く、「山登りを楽しむ人々は登山家」であるとしても、果して其人の關心を持つのは山登りであるのか、自身の健康なのであるか、風景なのであるか、地形なのであるか、植物なのであるか。鍼柏取りが生命を賭して行ふ楽しい山登りも、決して彼等に登山家の名を許すべきものでないことは餘りにも明白である。徒歩會、アルカウ會以下の會の大多數の人々は、「登山家」にかくの如き定義を與へて澄ました顔で居られる程に、「山」といふものに就て、山登り（アルピニズム）と云ふものに就て、曖昧な、無關心なモダーン・アルピニスト以下の、素朴極まる「登山家」なのである」⁴⁰⁾。

水野はここでアルピニズムの純化を目指して、民間大衆団体からの分離を主張するのだが、それはこれらがあまりに雑多な指向性をもっているからであつた。確かに、健康増進、体力増強、親睦、趣味の涵養から愛国的な敬神崇祖に至るまで、これら団体の趣旨にはあらゆる目標が書き込まれている。

例えば、「日本アルカウ會」は、1913年（大正2年）2月25日、草薙、河本という二人の人物が、御影から六甲を経て有馬までを往復したことに始まる。「會員の多くは京阪神に亘り。在郷軍人、商工業界其他、職業如何に拘らず、相携えて和氣藹々、自然の美妙に親み崇高の山靈に接して身體を錬磨し精神を鼓舞し、以て平日の誠實質素より各自の業務に精勵するの資たるべき所謂アルカウの趣味を以て集まれるを以て

特色とするなり」。「日本アルカウ會會則」には、「第一條 本會ハ山岳秀麗ノ境ニ趣味深キ遠足ヲ試ミ身神ヲ鍊磨シ剛健潤達ノ氣風ヲ興スヲ以テ目的トス。以上目的ノ實行ヲ容易ナラシムルタメ毎月二三回各日曜日ニ僅少ナル費用ヲ以テ主トシテ近畿ノ山岳ニ登リ其内一回ハ特ニ阪神手近ノ山野ヲ選ムモノトス」⁴¹⁾とあり、趣旨が雑多であるとしても、職業を持つ都市社会人として手堅い活動を志向していたことが分かる。

「霧の旅会」といった個性的な団体⁴²⁾を別とすれば、東京の社会人団体の主宰者には「裕福な商家の旦那衆」が多く、東京でのこの種の団体の最古参である「東京野歩路会」の「主宰者は本田月光さんという柳橋の瀬戸物店のご主人であった」⁴³⁾とされる。「東京野歩路會」は「月に二度位の休みしかとれない實業に就く人々が自然に親しむ上から云つても仲々力強いもので」、「山に登れ、山に親しめ」という主張が、「近頃やかましくいわれるアルピニズムの本質問題にふれてゐやうが、ゐまいが月に一度か二度の休みしかとれない實業登山者群の關知した處ではない」⁴⁴⁾のである。東京の「霧の旅會」は「無理をしない山登り」を標榜し、経済的、日程的かつ難度に配慮していたし、また京阪神の団体も同じような傾向にあり、『大阪旅行團年鑑』(大正十四年、第二版)に掲載された諸団体のほとんどが例会を月一回の休日を利用するとしている。

大正後期に紹介され輸入されたアルプス技術に学生や専門性を追求する登山家が魅了されたのに対して、これらの団体は社会人としての自己制限あるいは手堅さを保っていたのである。そして、この堅実さの上に雑多な目標の同居があったのだとすれば、都市生活者のアイデンテ

ィティーが「旅行」を多彩な目的を受け入れることのできるまでに抽象化したのだと言えるだろう。もはや「信仰」は多様な動機と目標の一つにまで相対化されている。こうした社会人団体における志向の総合性は、やがて木暮や田部が切り開いた新しい登山スタイルとしての「低山趣味」に専門家からの応答を見出すことになる。

まとめ

冒頭で紹介した柳田國男の「総国民の生活幸福の増進」という視点は、旅行によって「今までは籠居を甘んじていた人々が、…世間を知つたために損をしてもいいとすれば、」という見通しに基づいている。明治の近代化以降に日本人が旅行に出かけるようになるプロセスは、江戸時代の旅の単純な延長として進行したわけでもないし、鉄道敷設によって自動的に進行したわけでもない。大都市に自発的に形成された数多くの「旅行団」・「登山団体」がまわりの人々を、新しい旅行に誘い出したのである。湯治でもなく、季節の行楽でもなく、山や高原に、たとえ「遊覧本位」と皮肉られようとも、である。これは登山と信仰・村的共同体との伝統的なつながりを解体することなしにはありえなかったであろう。もしも、日本山岳會—山岳講演會—旅行団、という連続的な繋がりと拡がり形成されなかったとすれば、山に登るのは信仰篤き人か変わり者であり続け、一般人の旅行といえ、温泉地で芸者を上げて宴会する、季節ごとに桜・紅葉・滝を楽しみ、名所旧跡として定評のある場所を訪れるという、決まり切った内容にとどまっていたのではないだろうか。新たな風景美の発見も、都市を美的に再発

見することも、旅行の新たな形を探索すること
も、まして異質な他者との出会いもなかったで
あろう。「旅行の形式内容」は旧態依然たるも
のに止まっていたらう。

現代の旅行がどのような内容をも盛り込むこ
とのできる形式として発展してきたのだとした
ら、その発展の端緒を拓いたのは、伝統的信仰
を排除して不断の基礎づけを必要としつつ発展
した近代登山なのである。

凡例 引用文中の […] は引用者による省略を、
[／] は改行を示している。

注

- 1) 柳田國男『明治大正史世相篇』1931年、ちくま文庫版『柳田國男全集 26』、188-189ページ。
- 2) 神崎宣武『江戸の旅文化』岩波新書、2004年、石川英輔『ニッポンの旅』淡交社、2007年、参照。
- 3) 安川茂雄『近代日本登山史』あかね書房、1969年、353ページ。
- 4) 同上、461ページ。
- 5) 拙著「旅行の近代化と「指導機関」——大正・昭和初期の雑誌『旅』から——立命館大学産業社会学会発行『産業社会論集』2008年6月号、通巻137号、99-115ページ、参照。なお本稿は全体に亘ってこの論文を前提としている。
- 6) 日本旅行協会編『旅』1927年（昭和2年）11月號「旅行団体名簿(1)」、12月號「旅行団体名簿(2)」、1928年（昭和3年）1月號「旅行団体名簿(3)」、1929年（昭和4年）2月號「各地旅行団体名簿(1)」、3月號「各地旅行団体名簿(2)」
- 7) 木暮理太郎は槇の成功の影響を次のように述べている。「大正十年に在瑞西の槇有恒君が峻難を以て聞えた前人未踏のアイガー東山稜の登撃に成功し、之が我国に報ぜられて若き登山家の心を躍らせ、岩山登撃の傾向を助長させたことは疑いない」。木暮理太郎『山の憶い出』下、平凡社、1999年（初出1941年）、540ページ。
- 8) 日本旅行協会編『旅』1933年（昭和8年）4月号 十周年記念號、8ページ。
- 9) 「山岳會第一大會の記」『山岳』明治41年6月號、第3年第2號、所収、163-164ページ。
- 10) 『山岳』明治45年5月號、第7年第1號、186ページ。
- 11) 小島烏水『アルピニストの手記』平凡社ライブラリー、1996年（初出1936年）、32ページ。
- 12) 「三高山岳會主催講演會」『山岳』8-3、1913年大正2年12月号、所収、189-193ページ。
- 13) 小島榮「關西大會の記」『山岳』大正4年3月號、第9年第3號、所収、155ページ。
- 14) 大正3年11月3日付大阪朝日の記事、『山岳』大正4年3月號、第9年第3號、「雜報」欄、145ページ。
- 15) 小島榮「關西大會の記」『山岳』大正4年3月號、第9年第3號、所収、160ページ。
- 16) 「大阪に於ける山岳講演會」『山岳』大正4年9月號、第10年第1號、雜録欄所収、「各地登山會彙報(一)」、280ページ。
- 17) 『山岳』大正4年9月號、第10年第1號、雜報、288-290ページ。
- 18) 『山岳』大正4年12月號、第10年第2號、「各地の山岳會彙報(二)」京都組合銀行徒弟講習所山岳幻燈講演記事」142-143ページ。
- 19) 『山岳』明治39年4月號、第1年第1號、雜録欄所収、ページ数は付されていない。
- 20) 志村烏嶺、前田曙山『やま』岳書房、1980年。（初出1907年）、70-71ページ。
- 21) 同上、72ページ。
- 22) 武田久吉『明治の山旅』創文社、1971年、76ページ。
- 23) ウェストンたちが笠ガ岳登山の際に村民から妨害されたことについては、安川茂雄『近代日本登山史』あかね書房、1969年、80ページ以下を参照。また「講中登山」全般についても、本書はまとまった記述を含んでいる。また高橋定昌『日本岳連史—山岳集団50年の歩み—』出版科学総合研究所、1982年、82ページ以下も参照。さらに維新後の一時期却って講中登山が活発になる時期があることについて、安川茂雄『われわれはなぜ山が好きか』58-59ページ、参照。「信仰登山は明治以前から存在していたも

- の、このような講中登山の組織が盛んになったのは明治十年代で、廃藩置県から日本国内に関所などなくなり、旅行が自由になったための影響かともみえ、全国各地にさまざまな講中が組織されていた」。またこれらとは異なり、土地の有力者への事前の挨拶が摩擦を回避するのに有効との経験もある。『山岳』第1年第1號所収の石川光春「飯豊山行」には次のような経験が紹介されている。「明日雨なほ止まんとせず、出發の氣頓に挫けて唯天を仰ぐのみ、午後より天霽るゝに乘じ區長山内某及び社務所を訪ひ具に來意を陳じて山の様子などを問ひ待つ處多し、蓋區長及紳官は土民を左右するその手中にあるにより之に觀りて人足を得べく或は種、便宜を得べければなり、且無断にて登山せば彼等が感情を損ひて便あしければ登山するものは是非をとなし置くこそよけれ」(26ページ)。
- 24) 志村鳥嶺, 前田曙山, 前掲同書, 179-180ページ。
 - 25) 小島烏水, 前掲同書, 24ページ。
 - 26) 『山岳』明治39年4月號, 第1年第1號, 附録, 1ページ。
 - 27) 信仰登山が山の高低といった知識にさえ結びついていないことは、木暮理太郎も指摘している。木暮理太郎, 前掲同書, 330ページ。
 - 28) 小島烏水「山岳崇拜論」『山岳』8-1, 1913年大正2年4月号, 3-4ページ。
 - 29) 木暮理太郎, 前掲同書, 533ページ。
 - 30) 同上, 同ページ。
 - 31) 同上, 534ページ。
 - 32) 同上, 536-537ページ。
 - 33) 小島烏水『山岳紀行文集 日本アルプス』(近藤信行編) 岩波文庫, 1992年, 49ページ。
 - 34) 小島烏水「山を讀する文」明治38年, 小島烏水, 前掲同書, 130ページ。
 - 35) 小島烏水「山岳崇拜論」, 『山岳』大正2年4月號, 第8年第1號, 19-20ページ。
 - 36) 木暮理太郎, 前掲同書, 425ページ。
 - 37) 特に田部重治について、三田博雄は次のように述べている。「今日国民の間にもっとも広く普及しているスポーツは登山であるといわれるが、その登山の普及のうえに田部が果たした役割は絶大である。なぜなら、誰でもが容易に登れる低山登山を基礎づけ、これを美しい文章に綴り、多くの読者を魅了したのだから」。(三田博雄『山の思想史』岩波新書, 1973年, 116ページ。)
 - 38) 菅沼達太郎「秩父の山と山友達」, 『山と溪谷』昭和五年九月號, 第三號(秩父特輯), 35ページ。
 - 39) 柳田國男「峠に関する二、三の考察」(明治43年), 近藤信行編『山の旅 明治・大正編』岩波文庫, 所収, 249ページ。
 - 40) (『R・C・C報告』Ⅲ, R.C.C.本部発行, 1929年, 296ページ。この批判の背景について、安川茂雄は「もはや登山人口はおびただしい数にのぼり純正アルピニズムの行方は混迷しつつあるのが実情だった。すでにこういった状況は昭和初期より近郊に低山の多い関西においてはとくに兆候著しく、この風潮に対して水野祥太郎は弾劾文として『R・C・C報告 Ⅲ』中に「午後三時の山」なる一文をしたためた」と解説している。『近代日本登山史』あかね書房, 1969年, 453ページ。
 - 41) 『山岳』大正6年9月號, 第11年第3號, 雜録, 「各地登山會彙報(5)」, 213ページ。
 - 42) 「日本山岳会初期の探検登山時代の雰囲気を与えたグループとして、独自の個性をつくりだしたのが霧の旅会であった。同会は大正八年に松井幹雄を中心に山崎金次郎、田沢昌介、田尻春男などが発起人となり、武田久吉、木暮理太郎などの登山傾向の信奉者の登山団体であった」。(安川茂雄『近代日本登山史』あかね書房, 1969年, S44, 454ページ)
 - 43) 高橋定昌『日本岳連史—山岳集団50年の歩み—』出版科学総合研究所, 1982年, 87ページ。
 - 44) 『山と溪谷』創刊號, 昭和5年5月號, 「登山團體の組織と批判」, 39ページ。

Tour Parties and Mountaineering Lectures & Exhibitions: the Creation of Tourism Culture in the Taisho Period

AKAI Shoji *

Abstract: “Liberation from religious affiliations” and “separation from community bonds” are social and cultural prerequisites to popularization of modern tourism. The purpose of this study is to clarify how these two social and cultural prerequisites were introduced into the culture of tourism.

To this end, this paper focuses on a social phenomenon in which many tour parties were formed by working people in major cities during the Taisho Period (1912–1926); sums up the role played by the Japanese Alpine Club’s mountaineering lecture & exhibition activities and their characteristics, as a factor behind the social phenomenon; analyzes the sociocultural characteristics of modern mountaineering in Japan; and looks at the fact that tour parties formed as an extension of modern mountaineering culture opened up new possibilities of tourism culture.

Keywords: tour party, mountaineering party by working people, mountaineering lecture & exhibition, optical lantern, tourism culture

* Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University